

2019年 水稲施肥基準、病害虫防除基準の改正点とポイント

J A 中野市営農センター

[施肥基準]

○中野市独自のオリジナル肥料「田んぼ一番」は、いままでの「リンスターケイカル」と「けい酸加里」をひとつにまとめ、より登熟歩合の向上と収量性、品質を高め、散布量の軽減、低コスト化を図った総合水田土づくり資材。(24年現地試験で従来施肥に比べて最大で114.5%の増収。)

〈特徴〉：けい酸の吸収率を高めたことにより登熟歩合、収量性の向上が図れる。

〈成分〉：リン酸4%、加里2%、けい酸23%、苦土4.5%、マンガン0.5%、アルカリ36%

〈標準施肥量〉：10a当り100kg(5袋)

○「風さやか」は近年の高温登熟による胴割米対策として、キヌヒカりに代わる良食味の品種であるが、**基準施肥量(元肥・追肥)以上に施用しない**。基準以上の施肥はより熟期が遅くなり、刈取りの遅れ、食味低下、倒伏、いもち病の蔓延につながる。また、施肥量が基準より少ないと収量低下となるので注意する。**過剰な施肥とならば施肥基準の「BB粒状複合284」施肥量を50kgから40~50kgに変更した**。

○本田省力型の「水稲ワンタッチS100M」は、緩効性肥料で追肥が省略できる省力的な肥料。10a当り散布量は、コシヒカリは30kg(1.5袋)、一般品種で40~45kg(2~2.25袋)の散布。

成分：N16%、P17.8%、K10%、Mg3%。

○毎年わきやすい水田では、**稲わらの腐熟促進材「ファイン」**を稲刈後散布すると、腐熟が促進される。稲刈り後の降雨後や朝露など水分があるときに10a当り5kg散布する。また、散布後稲ワラをすきこむとより効果的。

[病害虫防除基準]

○ばか苗病の予防として、種子消毒には「テクリードCフロアブル」を使用する。200倍の希釈液に24時間浸漬する。

○育苗時の苗立枯病予防として、「タチガレエースM粉剤」を散布する。床土5l当りタチガレエースM粉剤を6~8g混和する。播種5日以上前の混和は効果が落ちやすいため、播種当日の混和を基本とする。

○いもち病の発生しやすい水田では、穂いもちの予防として、「コラトップ粒剤5」または「コラトップジャンボ」を出穂20日前(コシヒカリの場合7/20頃)に散布する。既に葉いもち病が発生している場合は、「オリブライト1キロ粒剤」または、「カスミン液剤」や「ブラシン粉剤DL・フロアブル」を発見次第散布する。粒剤の場合は、水深3cm以上で散布し散布後3~4日間湛水する。

○カメムシによる「斑点米」の発生が心配される水田では、「スタークル豆つぶ」を湛水散布する。「スタークル豆つぶ」は、出穂7~10日後に10a当たり250gを湛水散布する。散布時は水深5cm以上、3~4日間は湛水状態を保ち、散布後、7日間は落水、かけ流しはしない。

○育苗箱施薬の「ルーチンアドスピノ箱粒剤」からイナゴ類にも効果がある「ルーチンデュオ箱粒剤」を昨年に引き続き採用。いもち病への効果はそのままに、イナゴに対する効果から。

[雑草防除基準]

〈初期除草剤〉

- 「ピラクロンジャンボ」を昨年から採用。初期剤の省力剤で中期及び初・中期一発剤との体系処理とする。効果は粒剤と同様で、移植直後からノビエ 1.5 葉期までに使用する。散布時は湛水深 5~6cm を保ち 10a 当たり 10 パックを畔際から均等に軽く投げ込む。

〈初・中期除草剤〉

- 「キマリテジャンボ」は、SU 抵抗性雑草（ホタルイ、コナギ、アゼナ等）を含め、広範囲の雑草に有効。省力型体系処理として、田植え後 15 日頃に散布する。また初・中期一発処理として散布する場合は、移植直後～ノビエ 2.5 葉期までに使用する。
- 「クミスターL豆つぶ」は省力型初・中期一発処理として、近年問題となっているノビエ、コナギ、ホタルイに高い効果がある。移植 3 日後からノビエ 2.0 葉期までに使用する。散布方法は、手やヒシャクを使い 10a 当たり 250g を畦から散布。拡散性がよく、広い水田でも使用しやすい。

〈中・後期除草剤〉

- ホタルイ対策に「レプラス 1 キロ粒剤」を新規に採用。移植後 14 日後からノビエ 4.0 葉期までに 10a 当たり 1kg を湛水散布する。収穫 60 日前まで使用可能。（ホタルイに対しては 10cm まで）
- ノビエ、オモダカ対策に「ワイドショット 1 キロ粒剤」を引き続き採用。移植 15 日後からノビエ 4.0 葉期までに 10a 当たり 1kg を湛水散布する。収穫 45 日前まで使用が可能。

〈後期除草剤〉

- 後期省力型として、収穫 45 日前まで使える投げ込みタイプの「アトトリ豆粒 250」を本年より採用。移植後 20 日～ノビエ 4.0 葉期までに 10a 当たり 250g を湛水散布する。
- 後期除草剤として、収穫 30 日前までに使える「ワイドアタック SC」を本年も引き続き採用。移植後 20 日からノビエ 6 葉期までに落水後 10a 当たり水 100ℓに 100ml を入れた希釈液を散布。

★水稲除草剤の上手な使い方

①水持ちを良くする

湛水状態で散布する除草剤（初期剤・初中期剤・中期剤）は最低でも 3~4 日間は田面が露出しないようにし、水が持つ限り入水しない。

また、入水する場合も勢いを抑え農薬の処理層を壊さないようにする。除草効果及び、周辺環境への負担から散布後 7 日間はかけ流し、落水をしない。

水持ちを良くするため、畦塗りを実施したり、畦畔シートを使用する。また、代かきで田の凹凸が小さくなるようにする。

毎年残草が多く苦労している場合は、耕起前または刈取後の茎葉処理で除草効果が高まる。

②早めに散布する

水田雑草は水田に水を入れた時点から活動を開始するため、代かきと田植えの間が長い場合や散布時期が遅れると、雑草が大きく除草剤が効かない場合がある。

例として、「移植直後～ノビエ 2.5 葉期まで」となっている場合は、できる限り移植直後に近い時期に散布する。遅くなればなるほど、効果が落ち、残草が多くなる。

③定期的に薬剤を変更する

すべての雑草に効果がある除草剤は少なく、同じ薬剤を連用すると、特定の雑草が残ったり、薬剤抵抗性がつくことがある。雑草の種類により、薬剤を変更する。（特に初中期除草剤）また、毎年残草が残る場合は、茎葉処理の中期除草剤や後期除草剤を数年間使用すると、1 年生雑草の種子や、多年生雑草が減少し、翌年の雑草の発生が少なくなるので、上手に中・後期除草剤を使用する。